

昭和46年2月1日 第三種郵便物認可
平成29年6月1日発行（毎月一回一日発行）
俳句雑誌 沖 第11巻第6号



俳句雑誌[おき]

6月号

沖 発行所

梨花の夜

能村 研三

小澤克己さんを悼む

小澤克己さんが四月十九日に亡くなった。私と同齢の六十歳で未だにその死が信じられないほどである。

昨年、十一月十九日に長野県信濃町で行われた「一茶忌俳句大会」で小澤さんは講演者として招かれ、私も選句講評があつたので、ご一緒させていただいたのが最後となつてしまった。この時は、小澤さんもお元気で、ちょうどお昼に地元の方のお蕎麦の接待を受け、一緒に日本酒を酌み交わすなど、旅先で久しぶりの再会を喜びあつた。この時の小澤さんは、結社の「遠嶺」の方々三十人を引き連れての賑やかな参加であつた。東京ではお互いに忙しく中々ゆっくり話せないだけに良い機会であつた。

低翔は残る意志かと鴨一羽
今もなほ出替といふ慣あり
高々と萼脱ぐ朴や月の夜

小澤さんは、私の妻の従兄弟で、われわれが結婚したのがきっかけで「沖」に入会され、若手の句会「舵の会」でも一緒に勉強する機会を得た。前から詩をやっておられたので、俳句に対する勘も冴えておられて、「沖」においては、若手の書き手として評論もどんどん発表していただいていた。

平成四年に「遠嶺」誌を主宰され

雨あとの空気密なりつばめ来る

朝曇名刺を使ひ分けてをり

筍を掠めて走る京成線

韓国に瑠璃の坏あぐ梨花の夜

深悼 小澤克己さん二句

語りたき俳句の未来梅雨の星

論と句と携へてをり虹へ発つ

て「沖」を離られたが、その後も親しくお付き合いをさせていたのだ。

私と同じ地方公務員で図書館の仕事をしてたように記憶している。ただ、俳句に専念したいと決意をされ、十年位前に仕事をお辞めになった。

三月の末にお母様を亡くされ、この葬儀に私は駆けつけることが出来なかつたが、この時からかなり体の具合が悪かつたようで、その後すぐに入院されたそう。

小澤さんの通夜葬儀は、ちょうど韓国への出張と重なっていたため、前日ご自宅へ弔問に伺つて、小澤さんの亡骸と対面させていただいた。病んでいたとは言え、骨格などまだまだ若い感じで悔やまれた。

高空に水あるごとし青鷹 克己
オリオンの真下に颯々掃起す

湖国いま水の微熱の鱗射ぐもり
嶺掴みして夏雲の立ち上がる
いま醒めし夢の白さの冬鷗

謹んで小澤さんのご冥福をお祈りしたい。

能村 研三

蒼茫集

ナースコールボタン 北川英子

鳥雲にそしてその後のストリー

ナースコールボタンを渡し去るおぼろ

つけっぱなしの門灯が待つ春雲春愁の淵

へ一粒チヨコレート

行く春や折鶴の千翔たせたき

同じ時間生き一人病むさくらどき

花過ぎ 遠藤真砂明

青空へ幣の白妙御柱

木落しの男なだれや風光る

雨あはあはと三月の荒鋤田

海鳴りへ少し傾け遍路笠

花過ぎの海の疾風をまのあたり

風光る男が海へ出尽して

水陽炎 森岡正作

辛夷咲く庄屋の末の散り散りに

花筏小さき流れに小さき橋

自づからみな屈み見る座禅草

竹の子を売る禅林の明け透けに

遠浅の水陽炎に漁れり

ふらここのみな沸点を目指しけり

五穀の神 辻美奈子

樟若葉五穀の神もうずうずと

旅めくや残花の坂を行くことも

焼野原たりし地に土筆めくタワー

入学子思ひのほかの声出でし

鉢植の根のあたたまる朝寝かな

行く春の近江の米の届きたる



江戸も果てなる

千田百里

花前線ひたひた磁石針揺るる

組まむとす江戸も果てなる花筏

こまつ座のあるじ匿ひ花吹雪

蕉翁よ花よと巡りちと老いぬ

残花なほ伊勢へ十里のむすびの地

惜春や蛤塚の片身照り

切株

大畑善昭

こぞりゐて固き花の芽西行忌

炭焼きの仕上りどきの薄煙

切株の一つ一つよ春日撥ね

春の月号泣鳴咽ある家に

日帰りがつねの上京辛夷咲く

除雪機が秘境の湯へと道通す

山びこ

藤原照子

雪解の支流本流せめぎあひ

堂押祭果つや天心月掲げ

遺されて婚の記念日花ぶぶき

野遊や老いて従姉と縁戻り

杉青野山三句一帯ぬけ山桜山ざくら

飛花落花西行座像目をほそむ

天使

安居正浩

キャラメルに天使逆立ち春の風邪

花曇人は会ふこと繰り返し

珈琲を待つ間も桜揺れてゐる

眈に人の茶柱四月馬鹿

古井戸を抱き海棠の花明り

満開の桜通りの神経科

鍵盤

荒井千佐代

ジャングルジムのどこも入口春疾風

春野よりハライソまでの螺旋階

くつきりとチーズに齒形鳥雲に

葉桜や鳴らしつつ拭くピアノの鍵盤キ

春深し柳行李に琴の爪

頬白や生きる喜びなくもなし

初桜

松本圭司

しあはせの色あけぼのの初桜
今年また桜の咲いて胃を病めり
白粥に母の香のする花ぐもり
病窓の桜満開散るな散るな
花明りいのち明りと思ひけり
時といふ大河を越えて花吹雪

また一羽

辻 直美

入学の一年一組いちばんまへ
春の雷思考回路を断ち切りぬ
半仙戯むかしの衣は裾を曳き
遺影守りぬどこか花守に似て
背に掛けて貰ひしよりの花衣
また一羽零るるやうに巢立ちけり

美濃の春

吉田政江

行く春を来て細道のむすびの地
川三本越えて大垣うららけし
享保地図今と重ねて美濃の春
蛤塚背に伊吹嶺の雪名残
春興やまや猩猩軛ぎまとふ初披露

蕉翁像と握手してより春惜しむ

蝌蚪ぐもり

樋口英子

こころ決まりて鞆を離れけり
水面にも磁気うすうすと蝌蚪ぐもり
どかと来てたんぼの野を測量す
はたと風変りて野火の猛るなり
満開のさくらの息吹聞えさう
ようきたと筍飯をてんこもり

言の葉

秋葉雅治

初蝶を招く枝折戸片びらき
てにをはのやうに連なり蝌蚪の紐
さいはての絆に引かれ鳥帰る
言の葉四月見日を紡ぎし一生椿落つ
音無川の水脈絶え絶えに花筏
落城も落花も一夜燃えに燃え

能守り

千田 敬

洞もまた太古の楽器木の芽風
亀鳴くや電子歳時記増殖中
列島のさくら前線ぶれてけり

大垣三句

木曾・長良・揖斐川越えて春惜しむ

往く鯉に逆らふ鯉に風光る

根尾谷や能守り淡墨桜守り

枕のくぼみ

楠原幹子

をさな子の枕のくぼみ桃の花

恥づかしきまでに刈られし羊の毛

花疲れ目鼻平べつたくありぬ

春ともし掌に乳液の真珠玉

まなうらにげんげ田おちてゆく眠り

少年の土笛に生れ春の虹

古都暮春

宮内とし子

真間の井へ飛石伝ふ花の昼

格子戸の軒は豊かに燕来る

夕おぼる消えゆくものに白熱灯

春の鳶円周率の無限なる

古都暮春路地の伊太利レストラン

草萌に神事待つ綱うづたかし

入学児

鈴木良戈

母と子の相乗り自転車芽吹きけり

春は曙鶏鳴のゆるやかに

歌舞伎座の打ち上げ興行忘れ雪

校門の空の広さや入学児

舟留めの杭にまつはる藻の芽吹き

囀りや朝の一樹の膨らみて

国東

上谷昌憲

国東や梵字くづしに蝮の道

つくしんぼ瘦せて惚けて仏みち

磨崖仏胎に蔵して山笑ふ

目離さば消ゆ一湾の春の虹

湾おぼる濤も潮目も分かちなし

春月に呼べば来さうな鳥ひとつ

花ふぶく

中尾杏子

天空に春の虹の輪機首上げよ

花冷の監視カメラにみつめらる

雀斑かすも浮く若き修女の春の汗

受難節木の葉つなぎに干蝶

花ふぶく吾に天寿をいましばし

虚空より花のひとひら汝が魂か

潮鳴集

日の交差

甲州 千草

なにもない日なり苺のへたに花
太陽の幾度焦がす黄砂降る
抱卵期座蒲団を敷く力石
神鏡に春たけなはの日の交差
立てばすぐ花びら占むる午後の席

残雪

梶川智恵子

踏み抜きし残雪尺余水の道
春愁や閉ざされしまま三面鏡
春雪にぬれて朝刊とどきけり
朝晴れてほつほつ増えし露の臺
荒れながらまた荒れながら北の春

不調法

中島あきら

辛夷咲く風裏返しうらがへし
さくら散る鉄截の首を挽歌とし
かたくりの鬘風を解き放ち
この風に満を持したる桜かな
不調法とは連翹の咲きつぷり

かはいさう

頓所友枝

倒木の樹齡うかがふ花曇
リラ冷や薬手帳を持ち歩き
覗きこむさくら吹雪の能舞台
花冷や顔の大きな孔子像
落椿その時だけのかはいさう



余 熱 林昭太郎

海へ向く部屋に海見て内裏雛
アイロンにまだある余熱夕桜
花冷やノブに映れる己の掌
逝く春や石の狐の口真つ赤
春のみづ女滝の丈を愉しめり

窓全開に 栗原公子

花ミモザ窓全開にコーラス部
夜の闇のかくしきれざる花辛夷
靴音のつきくる夜の沈丁花
風光る蕾はなべて空あふぎ
アボカドにくろがねの艶春の夜

宇宙時間 七種年男

風止まぬ島の一日黄水仙
城跡といふもひと杭つづみ草
亀の背に浮力重力春の雲
ぜんまいの宇宙時間でゆるびけり
児童より先生元気黄水仙

薩摩雛 鳥居秀雄

晩学の^{アール}R 発音春寒し
鳥帰る郵便不在連絡票
かつしかの祖母の俎板せりなづな
浦島と乙姫さまの薩摩雛
春塵を来て立ち飲みジンライム

加 速 古屋元

去るものの加速や貨車と雪解川
年表の戦一行昭和の日
みな言つてしまひしかチューリップ散る
高階の北窓一つ開きあり
補聴器の底に一音春の蟬

臃 掛井広通

錠剤に小さき文字ある臃かな
ケータイに使はぬボタン春うらら
朝桜卵の殻に血の走り
引く波に乗らぬ足跡春惜しむ
坂道はペダルそのまま夏隣

沖作品



能村研三選

千葉

清水佑実子

佐保姫の心地透明エレベーター
腕立て伏せ競ひしことも桜咲く
春の水きつかけふつと歩み寄る
スイングは春打ち放つ始球式
つばくらめ水豊かなる小江戸かな
母容れて撮りたき枝垂れ桜かな
山植子の花に抜き差しならぬ闇
おぼろ月蒸気のやうな音立てり
言ふ後悔言はぬ後悔春の星
いち日を地に足つけて葱坊主
花万朶生前葬などしてみたき
帆船の位置それぞれに陽炎へり
歌舞伎座に鬘扇の鼓動なごり雪
春雷や落款を押すタイミング
防災の標語大きく火伏風

大阪

望月木綿子

市川

須山 登

千葉

峰 幸子

春愁や波を見つめて海を見ず
終の地の川面明りや菜種梅雨
夕星や沈丁の香のいづくより
隣家の明日は越しゆく朧月
あたたかや伏して主待つ盲導犬
初蝶や探しもものでもする如く
通学に畦は近道蛸蚪の水
遊具みなペンキ鮮やか新学期
梨の花気圧の谷の次々と
畑仕事捗りし日の初音かな
海を見る春耕の腰また伸ばし
啓蟄や着信びびと胸ゆらし
潮まねき朝日を仰ぐ腕庇
新塔の高みに足場霾れり
春惜しむ掛け声ぴしと柝の頭

市川市

板橋 昭子

和田 満水

(歌舞伎座)

沖作品 15句選評

*
能村研三

言ふ後悔言はぬ後悔春の星 望月木綿子

ことわざに「言わぬが花」とか「言わぬは言うに勝る」といった言葉がある。口に出して言わない方がかえってよいということとで、露骨に言うとは趣を失い、余計なことを言うとは差し障りがあるといった意味合いで使う。人との会話の中で、言った方が良いのか、それとも言わない方が良いのかの判断に迷うことがある。どちらをとっても、それが後悔になるかも知れないと思うと、判断に余計苦しむことになる。

花万朶牛前葬などしてみたき 須山 登

「生前葬」といえば、昨年亡くなった水之江滝子が以前に行った事が話題になった。私が死んだら誰が来てくれて、どんな顔で、何を言ってくれるのかは、気になるところである。自分の死後のことをいろいろ想像してみても、自分の死に対して、他人はどんな思いで臨んでくれるのか。花が咲き誇るとそんなことをふと思つたのである。

春愁や波を見つめて海を見ず 峰 幸子

春愁とは歳時記によれば「春のそこはかとな哀愁、ものうい気分をいう。春は人の心が華やかに浮き立つが、反面ふつと悲しみに襲われることがある」とある。「波を見つめて」「海を見ず」と句の中の矛盾が面白い。波という近視眼的なところに心は囚われているのだが、遠くの海を見つめる心のおおらかさはここでは起り得ないのだろう。

(以下略)

佐保姫の心地透明エレベーター 清水佑実子

ガラス張りの高層ビル、私の住んでいる市川にも45階建ての展望室のある施設がオープンした。ここに昇るには、専用エレベーターがあり、外が見えるシースルーエレベーター。高所恐怖症の人にとっては苦手かも知れないが、作者のように自分が佐保姫になった気分に乗っているのは楽しい。佐保姫は、秋の童田姫と対になる春のシンボルで、霞のペールを織り、柳の糸を染め、梅の花笠を縫い、桜を咲かせる女神。高層の展望施設に昇ると、一気に視野が広がり、開放感が溢れてくる。